

都の空

発行所

都の空事務局

事務局

東京都台東区東上野1-24-4

丸千第二ビル2F

浅野修一事務所内

TEL 03-3835-2233

FAX 03-3832-7175



母校三商の夜景

東雲

一月十七日、阪神大震災発生す。死屍累五千数百名を越す。

住宅、工場等の倒壊、損傷著しく、電気、ガス、水道などライフラインも壊滅的状況下にある。三十万人をこえる被災者に住む家もなし。仮設住宅も、抽選で被災者は寒中を路頭に哭く。

税理士も四人の方が犠牲者となった。神戸市を中心に事務所の倒壊も二百二十をこえるという。

犠牲者並びにご関係の皆様には心から弔意を表します。

わが三商会計人会の会員も、種々の立場で支援活動に加わっていることと思うが、それぞれが出来ることで、わが身にならえて真剣に考え、具体的な行動で救済、復興の後押しをしたいものである。残念なことに、倒壊した高速道路等に手抜き工事のあとも見受けられるという。これは人災である。救援活動の遅れにも、現地から強い批判の声が起きている。

国家全体の危機管理体制の問題でもある。地震多発国日本では、いつ次の震災がくるかも判らない一日も早く救済、復興を成し遂げ、次なる被害を最小限に食い止めることこそが、被災者に対するはなむけなのではないのだろうか。

随想 漂泊の俳人

芭蕉庵に寄せて

内田 清次郎 (昭和二十年卒)

去年の暮春に訪れた芭蕉の実家跡は、上野市赤坂町三〇四番地にあり、芭蕉の時代から変わらない町名でした。家屋の裏庭に「貝おほい」に書かれた幻の釣月軒が建っています。

当時の伊賀上野には、伊勢の国三十二万石、津の藤堂藩の支城「白鳳城」がありました。そこも広い城郭地のまま文化施設になっていました。

松尾神社は、上野天満宮の境内にありましたが、深川の富岡八幡にも芭蕉を祠った花木神社があるの思い出します。

一 俳諧青年

春や来し年や行きけん

小晦日

宗房 (芭蕉)

拓植七党のひとつ松尾党の松尾与左衛門の二男宗房すなわち後の

芭蕉は、五千石の名門伊賀藤堂家の御曹子主計良忠 (俳号蝉吟) 公に「近く仕え」ていました。お台所御用人を勤めたりという) が、蝉吟公は寛文六年二十五歳で早世したので、仕官出世の道を絶たれた宗房は、寛文十二年 (千六百七十二) 「貝おほい」一巻を上野天満宮「菅原社」に奉納し、俳諧で身を立てるべく江戸に出ることになりました。

当時の作品としては、寛文二年暮れの立春に
春や来し年や行きけん小晦日 (こごもり・旧暦では閏月がある年には、十二月のうちに立春と成る後に大晦日「おおみそか」と新年が来ます)。

さらに、京都俳壇重鎮松江重頼撰の「佐夜中山集」や、警城平城主内藤風虎編「夜の錦」に入選するなどして頭角を現します。

二 一流俳諧師に

江戸にでた芭蕉は、神田川の工書記などとして宗匠株のために資金をつくり、「貝おほい」を出版したり、高野幽山の執筆を勤めたりして俳諧の修行に励みます。今に残る関口芭蕉庵は、早稲田田圃を琵琶湖に見立て過去を偲んだところ。そして、延宝二年には京都の師北村季吟から指南書「埋もれ木」の直伝を受けて、念願の宗匠になりました。

猫の妻籠の崩れより

通いけり

桃青 (芭蕉)

その間、延宝三年からは俳号を「桃青」と改め、文学大名内藤風虎の藩邸サロンのメンバーになって、京・大阪・江戸の三都文壇と

延宝五年には宗匠立机の万句興行も果たし、早くもジャーナリスチックな有名点者に登り詰めたのです。

もともと、北村季吟を師とする芭蕉は、山崎宗鑑らによって解放された俳諧を庶民文化とした松永貞徳を中心とする貞門俳句の流れの中にいましたが、貞徳没後、突如として、奇想天外作りの滑稽な滑稽こそ俳諧なりとする談林派が俳諧を風靡するようになり、その

三 人生哲学による 俳風の転換

山宗因を迎えて百韻俳諧を興行し談林派に同調するようになり、宗匠を軸とする点達者の凶利と過当競争に汚れきった俳諧社会に漂う自分に懐疑の念を深め、「俳諧無尽経」を唱えつつ、荘子の哲学的思想に心酔していくのです。

四 深川芭蕉庵

芭蕉野分して盃に雨を聞く
夜かな

延宝八年 (千六百八十) 三十七歳になっていた芭蕉は、俳人としての自由な理想郷は「荘子」の説く純粋な「無何有の郷」に優遊自適するところ。郊外の深川村へ移転します。

「点作止め申し候」と書簡があります。無収入となりました。純粋な文学に人生を賭ける出立です。

(以下深川芭蕉庵のことなど本稿の続きは次の機会に。内田彩二)





職場見学と説明会 (平成6年12月20日)

神は私の内にあり

好川 榮一
(昭和十二年卒)

98年前に米国であったこと。一人の少女が「サンタクロースはいるのでしようか」と、ある新聞に向かつて質問したそうです。社説が答えました「サンタクロースはいます。それはこの世の中に愛や人への思いやりや真心があるのと同じように確かなことです。サンタクロースを見た人がいないからといってサンタクロースはいないと言えらるでしょうか。この世でいちばん確かで本当のものは大人の目にも子どもにも見えません。目に見えぬ輝かしい世界への幕を開けられるのは信じる心、想像力、詩、愛、夢みる気持ちだけです」

サンタクロースはいるのでしょうかという質問に対してまっ正面から答えていない分りにくい論説ですが、私はこの論説から勝手にあることを解釈し会得しました。愛、思いやり、真心、想像力、詩、夢みる気持ちはたしかに人間の心の中に存在します。その存在がサンタクロースであり神であり仏であるのだと考えるようになって

たのです。神も仏も我自身の中に、三商会計人会のすべての方の中に座しているのです。愛したり思いやったり美しいものを美しいと感じるのは心の中の神の所業なのです。神の存在するこの自分を大切にしようと思うようになりました。神の存在を疑問に思ってきた私は誤りでした。神は自分の中にいらつしやる。急に気持ちが変わりました。神はどこにいるのだらうと迷い、宇宙の彼方にまで心を馳せていましたが、その必要がなくなつたからです。

尤も人間の心の中には神もいるが悪魔もいると思います。全く飢えた時、人間は悪魔の指示に従わなければ食べ物にありつけないこともあるでしょう。だから地球上に永遠の平和が訪れないのかも。難しいですね。

(九五、一、十二)

母校生徒による 職場見学会開催

久保田 光 信 (昭和三〇年卒)

母校において実施されている市民講師による会計実務の特別講義を受講されている会計科の生徒の職場見学会が、三商会計人会主催により、平成六年十二月二十日(火)午後一時三十分江戸川区小松川一丁目五番二号都営新宿線駅前のメゾンリバーサイドビル内にある事業所を中心に実施された。

実施に当って、その計画を幹事の宮川先生が中心となり種々策定して頂き、最終打ち合わせを十二月十二日、校長のご配慮で校長室をお借りして行った。

学校側からは校長をはじめ足立、藤波、進藤の各先生、会計人会からは好川会長、石田副会長、宮川、荻野、久保田の各幹事が出席

学校長並びに会長からそれぞれご挨拶の辞を頂いて、早速、当日の計画案が発表され、それに基づいて行うことを決定した。

実施当日は学校側からは教頭先生をはじめ多くの先生方、並びに市民講師として大変ご苦勞を頂い

ている田村先生、そして会計人からは荻野先生と私が出席、二十四名の生徒の参加を得て、先に教頭先生の丁寧なるご挨拶を頂いて、次の通り実施した。

一 講 話

- ① 江戸川信用金庫東大島支店 相川清支店長により次の講話を受ける
 - 1、金融機関の種類
 - 2、信用金庫の特性
 - 3、金融・金利の自由化
- ② 荻野弘康先生より次の概略説明を受ける
 - 1、税法全般、特に所得税法について
 - 2、税理士の使命と役割及び資格取得について

二 見学会

- ① 江戸川信用金庫東大島支店 店内見学

- 支店長より業務内容の説明
- ② 久保田会計事務所内見学
 - 職員の不撓の姿を見学して頂き、その職務の内容、そして責任について話しを聞かせた
 - ③ ビル内に於いて営まれている、スーパーを中心とした各商店の見学

三 意見交換

職場見学の後、意見交換の場を設けたが、昨年実施した時に比べ、意見は少なかったが後で職員等から、生徒より、職場は明るく、楽しく自由なんですと聞かれたりしたと聞き、少しでも役に立ることが出来たならば幸甚と思つた尚、先生から面接に当つての注意点を聞かれ、自分の経験の中から回答したり、終始和やかな内に終らせることが出来た。

特に江戸川信用金庫東大島支店長さんには貴重なご講話を頂きその上生徒達に贈答品迄頂き、又ご協力を頂きました多くの先生方に感謝申し上げ筆を置かせて頂きました。



江戸川信用金庫
東大島支店
平成六年十二月二十日

ビマ回想

高木 菊次郎 (昭和十四年卒)

一、昭和十八年十二月に東京世田谷で編成された第五船舶輸送司令部要員は、昭和十九年一月三日に門司を出港し、マニラを経て同年二月一日アンボンに到着し、さらに任地の小スンダ列島ビマに向かった。しかし、私は暗号教育を受ける為、アンボンにしばらく残留を命じられた。当地の船舶地区隊司令部で暗号特技の大沢中尉から、マルメラ支部の平山少尉(幹候八期で私と同期、拓大出身)と一緒にみっちり教育を受けた。明快な講義と適切な指導であった。アンボン残留中にデング熱に罹り、何日も特校宿舍のベッドで、高熱と闘った。その時の宿舍の当番兵の方には大変面倒を見て貰った。デング熱も治り、暗号教育も終了してマルメラ経由で十九年四月にビマの本隊に追いついた。

は第五船舶輸送司令部ビマ支部と称したが後に第五航司が北方海域担当となった為に、南方海域担当の第三航司の隷下となり、第三船舶輸送司令部ビマ支部と変更された。ビマ支部はマルメラ支部と兄弟部隊で同時に編成された。ビマ支部は、関東、東北、北陸の管下から要員を徴収した。マルメラ支部は九州方面の管下から要員を徴収したものの、様であった。ともに小スンダ列島に位置して、ジャワ島から子モール島への食糧等の海上輸送を担当した。支部は、徴用船舶を使って任務を遂行するが、直接船舶に乗って海上で勤務する船舶工兵や揚陸隊とは異なる。民間で云えば船会社の様なものであつて、従つて、一般の戦闘部隊と違って特攻・下士官の人数に比較して兵の数は少ない。又、船の修理も任務の一つなので技術部の特兵も多かった。

私は電報班長として勤務することになったが、既に暗号業務のベテランの人達が円滑に仕事をさ

ていた。私は部隊長親展電報以外は班員の発信及び受信の点検であった。現場作業の揚塔班の小橋少尉(幹候八期、横浜高工出身)と同じ宿舍であつたが、慣れない作業で同班の人々は大変苦労された。しかし、電報班員は全員兵科で小銃を支給されていたので敵機がビマ上空に飛来した時には、暗号書を防空壕に入れると直ちに小銃を持って対空射撃の任に当ることもあつた。但し、無駄な射撃はしなかつた。

広島部隊から高松部隊になり、(部隊長交替)、部隊本部も戦況の激化に応じて何度も移転した。その中の或る宿舍で宮本軍隊と気象班の岩崎少尉と私が一緒であつた。勤務後、両先輩から色々を経験談を聞かせて戴いた。戦地とは思えない、ひとときもあつた。ビマ湾の水は青く澄み、夜は南十字星が美しく光つていた。

二、電報班は当部隊に専属する船舶通信隊と一体となつて任務を遂行していた。通信隊は中村少尉(幹

候八期、大倉高商出身)が隊長で堅固な壕に通信機を設置し当隊の為に良く協力して呉れた。お陰で通信連絡が支障なく実施され、電報班の暗号文も船舶輸送作戦に役立つことが出来た。

電報班には軍事機密の暗号書があり取扱いは常に厳重にされていた。昭和十九年も終り頃だったか私はマカッサル出張所へ暗号書を届ける為にスラバヤ経由で出張した。スラバヤからは海軍の大艇に便乗して空路マカッサルに行き久しぶりに所長の岩淵少尉に会つて暗号書を手渡した。マカッサルは海軍の第二十三根拠地隊司令部があり立派な港であつた。これより前、やはり暗号書率領でマカッサルからビマへ船で帰る途中、經理班の小川軍曹が敵潜の攻撃を受けて戦死されたことがあつた。当部隊では数少ない犠牲者の一人である。福をお祈りする次第である。

三、昭和二十年八月十五日終戦となつたが残念であると同時にほつとした。内地に帰れるかもしれないと思つた。どの様にして私達に終戦が伝えられたか思い出せない。終戦後、電報班の仕事もなくなり或る日、部隊長からスンパワ島中部のケンポに棧橋を作るよう命ぜられ十数人で出掛けたことがあつた。現地の村長らしい人と交渉して協力して貰い作業に取り掛つたが途中で岩崎少尉と交替とな

つて再び部隊本部へ帰つた。何の為にケンポに棧橋を作らなければならなかつたか覚えていない。終戦による接収には淳州軍がやって来た。ビマ棧橋に特技の軍刀を並べて没収された。淳州軍との折衝は川原中尉(幹候、東大出身)が当られたと記憶している。

幸い、高松部隊は現地民の信頼が厚かつたので終戦後も平穩に過ごすことが出来た。しかし、部隊本部は対岸のレミンターナに移転したりした後に、ブラジャックに位置して漁撈に従事した。又、部隊の一部は島々で農作業に従事した。この時の高松部隊は、錬成第十三連隊第一大隊とされていた。この地で故国に帰る迄、頑張つていた。昭和二十一年五月にバダス港を出港し五月二十九日名古屋港に二年五ヶ月振りに帰ることが出来た。

以上



戦闘

石田五郎

(昭和十一年卒)

あの時から半世紀以上を経過した。昭和一七年初、大東亜戦争は陸においてはガダルカナル、海においてはソロモン沖海戦が激烈となり正に日米天下分け目の戦況であった。

石田少尉は北支派遣軍衣兵団に所属し、山東省西部の守備に当たっていた。敵は津浦線をはさみ、申建武・劉昭漢の二大勢力が山岳地帯に蟠居し、一方魯東山岳地帯には将系正規軍が在り、その間隙を各方面に共産八路軍が出没していた。

その頃わが部隊の主力は師団作戦に出動し、私は留守部隊で初年兵教育の任務に就いていた。某日八路軍宣撫班が、十キロ程西北の部落に留営中との情報が入った。この宣撫班には岡野進のペンネームをもつ野坂参三が加わっている。大隊副官川中中尉を討伐隊長とし、歩兵三ヶ小隊に私の指揮する重機関銃小隊が加わり勇躍して深夜出陣した。山東の秋はかなりの冷気を覚える。目標部落の手前三

百米に散開し、午前六時を期して歩兵隊が三ヶ所から突入したが、敵は僅かに抵抗したのみで、縦横に廻らした交通壕を利用して忽ち逃走してしまつた。

わが隊は一旦集結後直ちに反転し帰路についた。二キロ程来た地点で、右方から不意にチェコ軽機を交えた激しい銃撃を受けた。約四百米先の小部落からの攻撃と判断、隊長命令で、この村に向かつて戦斗隊形をとる。わが重機も敵影を目標に点射、敵兵がもんどりうって倒れる。

「小隊長殿、後方三百米に敵」との声あり、同時に敵弾が飛来弾着も正確だ。初年兵はびたりと地上に伏せている。憶病者こんな弾は「当らん」と叱咤、重機二挺のうちの一を陣地変換これに応戦させるが、かなり多数の敵が迂回中であるのが双眼鏡で確認できる。敵は我を少数と侮り包囲作戦に移つてくるようだ。これを阻止するため掃射を浴びせるが、敵は壕へもぐっているのが難しい。敵の軽機、

小銃、わが重機、軽機低擲弾筒、小銃の音が激しく、敵弾の飛来も猛烈だ。「衛生兵前へ」の声が聞こえる。負傷者が出たらしい。

隊長から重機関援護射撃の伝令が来た。すわ突撃か二挺の重機兵前方の敵を制圧すべく射撃を開始したが、何と、わが軍は重機小隊を残して後退を始めた。

勇猛な部隊でも後退の時は弱い。まして今日は初年兵が加わっている。浮き足立つては危ない。むしろ敵中を突破して敵陣部落へ入るのが定石である。このヤット

コ中尉の馬鹿スケ、重機の援護を忘れて退却とは何事だ。軍律違反だぞ」と怒鳴つて見たが敵は壕を飛び出して追撃勢だ。これを目標に掃射、重機の威力は凄い。敵は忽ち沈黙した。♀に周辺に、パンパンと銃弾が集中して来た。敵兵二十名位が左方三十米に迫り狙撃して来る。戦慄が身体を駆けぬける。重機を奪われたら切腹も

だ。第一分隊には射撃続行、第二分隊には猷載させ後方に退かせ。各兵二ヶ宛の手榴弾のうち一ヶ宛を置かせる。残る一ヶは自決用ののだ。ついで第一分隊にも「載せ、後方へ」と命じ、小銃を持つている兵二名と私の拳銃で援護射撃だ。敵は突撃の姿勢さえ見せてジリジリと距離をつめてくる。今だ敵の突撃の機光を制し「手榴弾投げ」一斉に三ヶ投げて地に伏せ

る。凄ましい炸裂音が轟き敵は地に伏せたが、敵の柄付手榴弾も附近に落下し爆風と土砂を頭から浴びた。その砂塵のなかを健気にも敵兵一名が突込んで来たのを伏姿のまゝ、拝み射ちて倒し、転じて来た敵兵の顔は青白く歪み二十歳前に見えた。敵は死傷兵の収突に当たり追つて来ない。これで虎口を脱することができた。小銃隊には負傷兵が三名出たが、わが重機小隊に損害は無かつた。

私はこの戦争体験により、生につきまとう死の姿を見た。生と死を同時に司る宇宙力に遭遇したのか、生と死の境界線上で偉大な功力が救われたのか、一旦は死にそれを発条として蘇生したのか、人間頭脳の最極の身識いわゆる超能力が発揮されたのか、私なりの死生観を持ったのだが、終戦後、社会へ復帰し、一介のサラリーマンとなつた私は、その社会的な現実的な数々の出来事に埋没するあまり、青春時の鋭い感受性も失つてしまつたようだ。

私は戦時中は職業軍人として忠君愛国のため(現代青年には理解できないことであろうが)わが身を鴻毛の軽きに置き挺身して来た。多くの青年もそうであり、たしかに日本男子崇高の生き方であった。

しかし、今考えて見ると、神州不滅の観念への奉仕が、いかに

膨大な人柱に支えられていたか。二度としてはならない戦争を体験した私。戦争の記憶を取り払おうとして来たが、祖国の未来を信じて護国の鬼となつた多くの戦友を忘れ去ることはできない。天皇も、大臣も外国の戦七の墓に花輪を供えるのに靖国神社へ参拝できないのか。噫、英霊は哭いている。



三商 この一年

教頭 飯島 篤

去る三月三日、厳しい寒さも和らぎ白梅の可憐な花びらが舞い降りる中、平成六年度第四七回(通算六二期)卒業証書授与式が挙行されました。式には都築同窓会長、好川会計人会会長を始め多数の来賓のご臨席を賜り、誠にありがとうございました。祝福と励ましを頂き、卒業生にとってこの上ない心の支えとなり、巣立っていったことと思います。

さて、平成六年度入学生からは大きく二つのことが変わりました。その一つは、商業科が一学級減り五学級になりました。会計科は昨年と同じ二学級です。一学年の生徒数は二八〇人となりました。生徒減により、一人一人に目が行き届くようになり、教師と生徒との心の交流もさらに深まることが期待できます。

もう一つは、教育課程(各教科の授業内容)が改正され、男子と女子の授業内容に区別がなくなりました。例えば、家庭科は男子も必修となり、男女一緒に同じ教室で授業を受けております。家庭科の教員は、男子の目から見た意見が聞けるようになり、授業に深まりができた、と話しています。

会計科三年生の「課題学習」の授業は、今年も田村都彦先生を講師にお迎えして実施されました。七月と十二月に合計三十時間に及ぶ授業でしたが、生徒は皆熱心に講義を聴いていました。先生の事務所の職員も手伝いに来られ、普段は学校で教えてもらう機会の少ない「人としての在り方生き方」なども含めた「生きた授業」を受けることができました。また、会計事務所見学会も企画していただき、江戸川信用金庫東大島支店や久保田会計事務所その他メゾンリバーサイドビル内の事務所の見学や、荻野弘康先生による税理士資格取得等についての講話を聴く機会にも恵まれました。宮川先生を初めお世話になった先生方に厚く御礼申し上げます。来年度も予定しておりますのでよろしくお願致します。

三学期が始まって数日過ぎた頃、職員室に来て「おはようございます」と元氣よく挨拶する生徒がいました。聞くと、「合宿に参加して二級に合格した生徒です」との事でした。会計科一学年の簿記合宿は、今年も十二月に、雪に埋もれた山寮で実施しました。行きのバスの中では早速仕訳の学習が

始まりました。寮では、教師一人に生徒が四人という丁寧な指導により、理解不足だった生徒も、熱心に学習していました。簿記部は、今年もよく頑張りました。六月の全国商業高等学校協会主催簿記コンクール都大会では、団体第三等となり、個人では、会計科三年の横田浩子さん、井苺晴美さんの二人が優良賞を、岡本美香さん、橋川恵子さん、菊地佳世さんの三人が優良賞を受賞しました。また、横田浩子さんは、個人の部で都代表に選ばれ、全国大会に出場しました。七月の東京会計法律学園・日本経済新聞社主催簿記選手権大会では、三商が準優勝し、都代表として全国大会に出場しました。

毎年六月には体育祭が行われていますが、今年は「筋肉フェスティバル」と銘打って実施しました。数年前から途絶えていた応援団も三年前から復活し、体育祭の盛り上げに一役買っています。以前は応援歌も歌われていた、と聞いていますので、来年度は是非、応援歌も復活させたいと思っております。実行委員長吉田君は「人の上に立ち、みんなをまとめる大任を任せてくれた先生方、そして、協力してくれた生徒の皆さんに、感謝の気持ちで一杯です。」と感想を述べていました。中学時代に人を動かす、まとめた経験を持つ生徒は本校では多くありません。様々な体験の機会を与え、自分自身の良さ・個性を伸ばしていきたい

と思っております。十月には三商祭も実施されました。他校では、緑日やお化け屋敷が多くありますが、三商祭の質の高さは他のどんな高校にも負けない内容だと自負しております。開会式は電光装飾とフラスバンド部のファンファールで華やかに始まり、多くの学級が舞台で『劇』や『合唱』などで練習の成果を競い合いました。高い目標を掲げ、実行委員会を中心に協力して取り組み姿は頼もしく、三商の自慢の一つと言えます。

最後になりましたが、卒業生の進路先を報告致します。
 卒業生 二九二人
 就職 一九二人(六六%)
 大学・短大 一五人(五%)
 専門学校 四一人(一四%)
 その他 四四人(一五%)
 『就職難』についてはマスコミでも繰り返し報道されてきましたが、本校も同様に、就職・進学とも極めて厳しい状況でした。会計人会の諸先生方の事務所へ、是非、後輩の面倒を見ていただけたら、と願っております。

久保田会計事務所での実習 (平成6年12月20日)



と多くの機会を与え、自分自身の良さ・個性を伸ばしていきたい

